

シュトラウス家の「第三の矢」、末弟エドゥアルトのポルカ！

曲目解説

日本ヨハン・シュトラウス協会
若宮 由美

2015年はウィーン大学創立650年。さらに、シュトラウス家の末弟エドゥアルト(1835-1916)の生誕180年でもあります。「ハンサム・エディ」と呼ばれたエドゥアルトは、1861年に指揮者デビューを果たし、それ以降はシュトラウス家の三兄弟がともに指揮台に立ちながら、父ヨハン1世(1804-49)の創設したシュトラウス楽団を率いていきます。次男ヨーゼフ(1827-70)の没後は、エドゥアルトが1901年の解散まで楽団の指揮を担当しました。2015年のニューイヤー・コンサートでは、エドゥアルトのポルカ3曲が演奏されます。

その他、ウィーン万博に関連する楽曲も登場します。1873年の万博期間中に、ヨハン2世(1825-99)はプラターの万博会場に登場し、ドイツのランゲンバッハ楽団を指揮。ウィーン音楽を広く人びとに紹介しました。この万博には日本も出品。6月にウィーンを訪れた岩倉使節団もシュトラウスの演奏を耳にしました。

第一部

フランツ・フォン・スッペ：オペレッタ《ウィーンの朝・昼・晩》序曲

Franz von Suppé: *Ein Morgen, ein Mittag, ein Abend in Wien. Overture.*

1858年にパリからオッフェンバックのオペレッタがウィーンに輸入され、オペレッタは人気の演目となりました。ダルマチア(現在のクロアチア)出身のスッペ(1819-95)は、1860年にウィーンではじめてオリジナル・オペレッタを作曲した人物です。2幕からなる《ウィーンの朝・昼・晩》は正確にはオペレッタではなく、「歌付きの笑劇」として1844年2月にヨーゼフシュタット劇場で初演されました。いまでは華やかな序曲のみが有名です。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ 東方のおとぎ話 op.444

Johann Strauss Sohn: *Märchen aus dem Orient. Walzer, op.444*

生涯に多くの勲章を授与されたヨハン2世でしたが、1892年にはオスマン帝国からの勲章をもくろんで、50歳を迎えるスルタンのアブドゥルハミド2世(1842-1918)にこのワルツを献上します。11月27日に楽友協会で開催された「エドゥアルトの慈善演奏会」で初演されました。序奏と第1ワルツには、オリエント風の特徴がみられます。

ヨーゼフ・シュトラウス：ポルカ・フランセーズ ウィーンの生活 op.218

Josef Strauss: *Wiener Leben. Polka française, op.218*

1852年、シュヴェンダー(1839-77)はウィーン郊外(現在の15区)にレストランや舞踏会場を併設する大規模な娯楽施設「シュヴェンダー・コロッセウム」を開業します。ここで1867年の謝肉祭(2月18日)に、「ウィーンとパリの生活」と銘打った大仮面舞踏会が開催されました。3つのホールで別々の舞踏会が開かれ、ヨーゼフは「ウィーンの生活」と名付けられた舞踏会の指揮者として、同曲を初演しています。

エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・シュネル 人が笑い生きるところ op.108

Eduard Strauss: *Wo man lacht und lebt. Polka schnell*, op.108

1873年には万博会場のみならず、街中も万博一色に染まりました。この曲の題名も万博に関連したものといわれています。9月2日にフォルクスガルテンで開かれた「エドゥアルトのための慈善演奏会」で演奏。エドゥアルトは万博会場で兄がドイツの楽団を指揮することに反対したため、エドゥアルトの楽曲は万博会場ではまったく演奏されませんでした。

ヨーゼフ・シュトラウス：ワルツ オーストリアの村つばめ op.164

Josef Strauss : *Dorfschwalben aus Österreich. Walzer*, op.164

ジルバーシュタインが書いた同名小説に着想を得て作曲。1864年9月6日にフォルクスガルテンで初演されました。小説は田舎暮らしを綴ったもので、ワルツ創成期にランナーや父ヨハン1世が用いたレントラー風ワルツの形式をとります。レントラーとはオーストリアや南ドイツの民族舞踊で、ワルツの先祖のひとつ。牧歌的なワルツはヨーゼフの代表作で、彼の追悼式(70年10月18日)でも兄ヨハンの指揮で、ポルカ・マズルカ 女心 op.166とともに演奏されました。

ヨハン・シュトラウス2世：ポルカ・シュネル ドナウの岸辺から op.356

Johann Strauss Sohn: *Vom Donaustrande. Polka schnell*, op.356

1873年3月1日、アン・デア・ウィーン劇場でヨハン2世の2作目のオペレッタ《ローマの謝肉祭》が初演されました。このポルカは、オペレッタの第2幕と第3幕のモチーフから作られています。題名はウィーン万博を意識したのですが、万博開幕前の4月6日に楽友協会では初演されました。万博会場でも10回以上演奏されています。

第二部

ヨハン・シュトラウス2世：常動曲（音楽の冗談）op.257

Johann Strauss Sohn: *Perpetuum mobile. Musikalischer Scherz*, op.257

1861年、ゾフィーエン・ザールで巨大な舞踏会が開催されました。この舞踏会は「カーニバルの永久運動、または終わりのないダンス」と題され、シュトラウス家の三兄弟がそれぞれの楽団を指揮して、絶え間なく50曲以上を演奏しました。「ペルペトゥム・モビレ」はラテン語で「永久運動、常動」を意味します。舞踏会の標語に着想を得て、ヨハン2世は終わりのない音楽、つまりは常動曲を作曲。4月4日に初演しました。各楽器がかわるがわるの妙技を披露します。悩みどころは、終わりのない曲の終止方法でした。

ヨハン・シュトラウス2世：加速度円舞曲 op.234

Johann Strauss Sohn: *Accelerationen. Walzer*, op.234

1860年2月14日にゾフィーエンザールで開かれた技術者舞踏会で初演されました。ピアノ初版譜の表紙には、西風の神ゼフィールとともに、蒸気船、熱気球、電線が描かれています。産業革命の風がウィーンにも吹いてくる様子が、序奏や第1ワルツで表現されます。後年、ケルドルファーが男声合唱曲に編曲しましたが、その時の題名は時は金なり！でした。

ヨハン・シュトラウス 2 世： 電磁気ポルカ op.110

Johann Strauss Sohn: *Elektro-magnetische Polka*, op.110

1852 年 2 月 11 日、ゾフィーエンザールで技術者舞踏会が開かれました。ウィーン工科大学の技術学生を支援する舞踏会のために、26 歳のヨハン 2 世は 電磁気ポルカ を作曲しました。題名は、電磁気の実用化に貢献したデンマーク人のエルステッド(1877-1851)を讃えるために、主催者が推奨したと考えられています。

エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・シュネル 蒸気をあげて op.70

Eduard Strauss: *Mit Dampf. Polka schnell*, op.70

蒸気機関車を描写した軽快なポルカ。1871 年 2 月 12 日に王宮のレドゥーテンザール（舞踏会場）で開催された、由緒ある工業舞踏会で初演されました。有力貴族のご婦人方が参加する格式高い舞踏会に、このポルカはワルツ 合併 op.74 とともに献呈されました。

ヨハン・シュトラウス 2 世：ワルツ エルベのほとりで op.477

Johann Strauss Sohn: *An der Elbe. Walzer*, op.477

ヨハン 2 世が作曲した最後のワルツ。1897 年 11 月 30 日に楽友協会で開催された「エドゥアルトの慈善演奏会」でヨハン自身の指揮で初演され、大喝采を浴びました。ドレスデンのゼーリング社から出版された楽譜表紙には、エルベ河沿いのドレスデンに建つカトリック宮廷教会や郊外の町であるロシュヴィッツの絵が描かれています。

ハンス・クリスティアン・ロンビ：シャンパン・ギャロップ op.14

Hans Christian Lumbye: *Champagner-Galopp*, op.14

「北欧のシュトラウス」と呼ばれるロンビ(1810-74)はデンマークの作曲家。ランナーやシュトラウス 1 世の影響を受け、ダンス音楽を数多く作曲しました。このポルカは 1845 年 8 月 22 日にコペンハーゲンのティヴォリ公園で初演。万博開催中の 1873 年 9 月、彼はウィーンを訪れ、造園協会のホールでツィーラー(1843-1922)の代役を務めています。

ヨハン・シュトラウス 2 世： 学生ポルカ op.263

Johann Strauss Sohn: *Studenten-Polka. Polka francaise*, op.263

1862 年 2 月 24 日、王宮内の格式の高い舞踏会場で学生舞踏会が開催されました。革命から 10 年以上を経て、はじめて開かれる学生舞踏会でしたが、貴族のご婦人方の支援を得て王宮での開催となりました。ヨハン 2 世は同ポルカをこの舞踏会で初演。いざ楽しんで さあ、もう一杯、はじけるワインを飲もう！ 等の学生歌が引用されています。

ヨハン・シュトラウス 1 世： 自由行進曲 op.226

Johann Strauss Vater: *Freiheits-Marsch*. op.226

1848 年の革命と関連がある楽曲と考えられています。序奏部はシラーによる『群盗』(1781)の「群盗の歌」(第 4 幕第 5 場)と一致します。「自由に生きようぜ」という歌は、学生歌「いざ楽しんで」(ヨハン 2 世の 学生ポルカ にも引用)として流布していました。

ヨハン・シュトラウス2世：アンネン・ポルカ op.117

Johann Strauss Sohn: *Annen-Polka*, op.117

父ヨハン1世による有名なアンネン・ポルカ op.137 から10年経った1852年に、26歳のヨハン2世は自身のアンネン・ポルカを作曲しました。愛らしいポルカは、アナ祭(7月26日)の前夜祭として、プラーターのレストラン「ツム・ヴィルデ・マン(荒くれ男亭)」で開催された『森の音楽祭』で初演され、人気を博しました。同じ年のドイツでの演奏旅行でも、1856年に初めてサンクトペテルブルクに登場した時にも、ヨハン2世はアンネン・ポルカの作曲家として紹介されました。

ヨハン・シュトラウス2世：ワルツ 酒・女・歌 op.333

Johann Strauss Sohn: *Wein, Weib und Gesang*, Walzer, op.333

この曲は、当初、合唱とオーケストラのために書かれ、ウィーン男声合唱協会によって1869年2月2日に初演されました。合唱版は、「天にまします神様が、いきなりブドウの若枝を生えさせた」で始まり、第1ワルツで「さあ注げ、それ注げ…フランケン・ワインをたっぷり注げよ、なければ愛しのオーストリア産」と歌います。オーケストラ版は3月16日にハンガリーのベストでシュトラウス楽団により披露されました。

エドゥアルト・シュトラウス：ポルカ・シュネル 粹に op.221

Eduard Strauss: *Mit Chic*, Polka schnell, op.221

1883年11月4日、楽友協会で開催される恒例の日曜コンサートに、久しぶりにヨハンとエドゥアルトの兄弟がそろって登場しました。ヨハン2世は、初演したばかりのオペレッタ《ヴェネツィアの一晩》からモチーフを引用した入江のワルツ op.411を初演。一方、エドゥアルトはかわいらしいポルカ 粹に を初演し、喝采を浴びました。

* ヨハン・シュトラウス2世の作品タイトルについては、日本ヨハン・シュトラウス協会『ヨハン・シュトラウス2世作品目録』(2006)にしたがっています。